

車と携帯をセット販売 ITSビジネスが本番へ!

トヨタ自動車とパイオニアは今秋、自動車、カーナビに通信機能を搭載し情報サービスとセットで販売する。ITSが自動車、車載機器メーカーの顧客囲い込み競争の焦点となった。

自動車と通信の融合で、2005年には20兆円とも試算されるITS市場が立ち上がる。期待感ばかりが先行して、実際の収益モデルを描き切れなかったITS市場が今、自動車、車載機器メーカーの戦略的なサービス開発競争の舞台として本番を迎えている。自動車や車載機器に通信機能を装備し、自動車(カーナビ)向け情報通信サービスを標準機能にしようというのである。

2001年12月末時点において、日本国内の四輪車合計保有台数は約7340万台(日本自動車工業会発表)。これまでも、これら自動車のドライバ

ーに向けて、ビジネス利用やプライベート利用も含め、多くの自動車向け情報通信サービスが提供されてきた。例えば、1997年11月に始まったトヨタ自動車の「MONET」をはじめ、本田技研工業の「インターネットシステム」や日産自動車グループの「コンパスリンク」、日本緊急通報サービスの「HELPNET」などである。

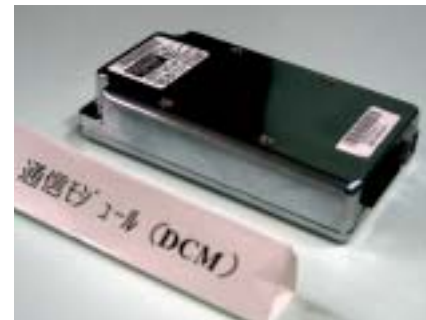
これらのサービスは、携帯電話をつないで利用する通信型カーナビを対象に展開されてきたわけだが、実質的な会員数は総計でも数万人規模といわれる。2001年度のカーナビ市場規模が約213万台であったことを考

えると、対カーナビの普及率では5%にも達していないのが現状だ。

しかし、ここにきて状況が好転しつつある。理由は、自動車および市販カーナビ市場でそれぞれトップシェアの実績を持つトヨタ自動車とパイオニアが、今秋、携帯電話システムの通信モジ



G-BOOK対応車載端末。外部インターフェースとして、無線通信機能のほか、SDメモリーカードスロットを搭載する



G-BOOKのデータ通信モジュール「DCM(Data Communication Module)」。KDDIのCDMA2000 1xを採用



G-BOOKユーザーが最新の地図や音楽、ゲームをSDメモリーカードにダウンロードできる自動販売機「E-TOWER」

表 通信モジュール内蔵型車載機器を利用したサービス

サービスブランド企業 (サービス提供/販売企業)	トヨタ自動車 (ガズメディアサービス)	パイオニア (パイオニアモバイルネットワークス)	モバイルキャストテレマティクス (同上)
サービス名称	G-BOOK	Air Navi対応サービス	未定
サービスの狙い	自動車の付加価値化	カーナビゲーションシステムの付加価値化	国内3大自動車メーカー以外、および輸入車を対象としたオープンプラットフォームの構築
サービス開始日	2002年秋ごろ(PC向けサービスは10月1日)	2002年11月中旬	2003年5月
サービス/システムの主な特徴	SDメモリーカードに対応。コンビニに設置されるキオスク端末「E-TOWER」から新しい地図や音楽、ゲームなどを取り込むことができる。UCSユーザーカスタマイズドサーバーを用意。ユーザーごとに画面設定やメンテナンス情報などをG-BOOKセンター側で管理する。電子決済機能を実装。主要なクレジットカードやプリペイドカードを利用した基本料金の支払いや有償サービスの購入ができる	クライアント/サーバー型のナビゲーションシステム。サーバー側にある最新の地図情報や店舗情報を必要に応じてダウンロードして更新できる。カーナビ本体と基本サービス料を組み合わせた料金プランを豊富に用意。地図データに「iフォーマット」を採用。iフォーマットは業界25社(9月17日現在)からなるiフォーマットフォーラムがネットワーク配信向けに開発した専用フォーマット	車載サーバー「TAS」(下記参照)に通信機能、映像・音声出力/ストリームデコード機能、ハンズフリー機能、車内LAN機能を実装。ユーザー向けに専用ポータルサイト「MTQ(Mobilecast Telematics Center)」を開発。認証・決済システムやゲートウェイ機能を備える。エンドユーザーに対して自らサービス提供する一方、自動車メーカーや車載端末メーカーに対してTASとMTCをパッケージ販売していく
基本サービス/通信料金	月額数百円程度を予定(G-BOOKシステム機器や通信モジュールなどは自動車本体価格に含む)	プランA: 36回払いで月額3980円、ボーナス時加算額1万5000円(本体価格含む)。4年目以降は基本サービス料として月額1980円)	未定
通信モジュール搭載機器	データ通信モジュール「DCM(Data Communication Module)」, デンソー、NECと共同開発	通信モジュール内蔵型カーナビゲーション「Air Navi(エアナビ)」「AVIC-T1」	テレマティクス用アプリケーションサーバー「TAS(Telematics Application Server)」, オムロンと共同開発
通信方式	CDMA2000 1x(KDDI)	CDMA2000 1x(KDDI)	CDMA2000 1x(KDDI)
データ通信速度	最大144kbps	最大144kbps	最大144kbps

ールを標準搭載した新型自動車、カーナビを投入するからだ。両社は、情報通信サービスを製品の一機能と位置付け、これを顧客獲得の切り札に積極展開していくのだという。

新型自動車やカーナビに組み込まれる通信モジュールは、KDDIの3G携帯電話システム「CDMA2000 1x」に対応している。全国エリアの1xを無線インフラに、両社は自動車とカーナビにMONETのような情報通信サービス、さらに通信料金をセットにして販売していく。これまでのように、サービスを受けるために携帯電話をカーナビにつないだり、サービス料や通信料を別個に支払わなければならないといった不便は完全に解消される。

ここからは、自動車、車載機器メーカーの戦略と、ITS市場で商機を掴んだKDDIの今後の展開を追って

いこう。

月額数百円の定額制

初めに、トヨタ自動車とパイオニア、両社のサービスの全容を見ていく。

トヨタ自動車は今秋、新型車に内蔵するデータ通信モジュール「DCM(Data Communication Module)」を用いて提供するサービス「G-BOOK」は、通信料込みの定額制で、月額数百円程度で提供される見通しだ。G-BOOKの核となるDCMは、同社とデンソー、KDDIが共同開発している。

特徴の1つに、SDメモリーカードから地図や音楽、ゲームなどを直接取り込める機能があげられる。月額サービス料金の支払いを嫌うユーザーに対して、カーナビとして最低限の機能を担保するためだ。また、ユーザーカスタマイズドサーバー(UCS)と呼

ばれるユーザー情報管理のための専用サーバーをG-BOOKセンター内に設置。通信機能を生かし、ユーザー個別のシステム設定やメンテナンス情報をネットワーク経由で管理する。さらに、クレジットカードやプリペイドカードによる電子決済にも対応する。

G-BOOKは、トヨタ自動車ですでに展開している会員制情報サービス「GAZOO」をベースに、GAZOOの移動体向けサービスと位置付けられている。そのため、G-BOOKを利用するにはGAZOOの会員登録が必要とされている。サービスの運用は、GAZOOのシステム機器を企画・開発するガズメディアサービス(トヨタ自動車75%出資)が担当。同社には、ナビゲーションに特化したサービスが売りのMONETもあるが、これはG-BOOKのサービスで代替できるため、



パイオニアの無線通信モジュール内蔵型カーナビゲーション「Air Navi(エアナビ)」。11月中旬発売予定